

絵画教育研究（その1）

ー幼児・児童画の心と基礎デッサン入門ー

古賀 隆一

Picture Education Study (Part 1) : Psychology of an Infant and the Picture Painted by a Child and Introduction to Basic *Dessin*

KOGA Ryuichi

キーワード：幼児・児童画教育 援助と指導 抽象・具象・非具象 形を捉える 感性

概要：本論は、教師を目指す本学の学生が、図画・工作教育で直面すると考えられる幼児・児童画（以下幼・童画）の描画心理の受け止め方や、必要な《感性》を学習する授業における実技実践研究の序論である。幼・童画の援助や指導の方法は、その描かれた《心》を受け止める感性を磨くことが学習のポイントである。子どもの絵を理解する上で、大人が学ぶ絵画修練は、心理、感性の働きの捉え方が要素として関連している。従って基礎デッサンの学習は、作画の要素を学ぶ点に於いて、必要とされる抽象性も学ぶ研究と考えている。教育現場で経験したことを踏まえ、基礎デッサンの学習を通して、図工造形教育《援助と指導》の課題や問題も研究対象である。

1. はじめに

本稿は、幼・童画教育に携わる教師や保育者が幼児絵画の抽象表現を理解する上で、必要な指導力をどのようにして身につけるか。課題である指導力は、絵画の基礎であるデッサンを学び、作画に必要とされる要素を学習する。そのデッサンは、学習者の目的意識によって習練の方法も内容に差が生じる。主な違いは学習の深度、精神性である。教員養成の本学では、より専門的であることを目標とする。絵画指導に携わる教師は、デッサンは出来なくても子どもの指導や援助は、出来ると安易に考えていないか。幼・童画教育の指導に描画の特別な才能が必要であるとは思わないが、指導・援助という観点から幼・童画を観る力をつける学習方法の研究を進める。

子どもの絵は、チゼックやローエンフェルド等の研究者によって、研究がすすめられ発達段階等、幼・童画の本質が明らかにされた。我が国では、大正期にヨーロッパ留学後の山本鼎（画家、版画家）によってもたらされた自由画教育であったが、一般に知られるようになるのは後のことである。戦後、写本臨画教育から脱却した子どもの

自由画教育であるが、教育現場では、幼・童画に対する《指導》の姿勢が根強く、《援助》する教育の理解は未熟である。特に幼児画は、感性に訴える部分が大きいため、教師は抽象化の理解を具体的な写実的デッサン学習から抽象的感性を磨く訓練をするべきと考えている。

発達段階を逆手に取って、教師を対象とした〈描き方の技術指導書〉がいまだに作られているのは嘆かわしく思うし、看過出来ない事実である。このような〈図工教育技術指導書〉の横行の背景は、教師の描画力の未熟さにあると考える。作画活動は子どもの制作過程そのものを、より大切にするべきであるから、幼児に絵画技術を教える等は論外であり、まして完成を予測する指導（結果誘導）はあってはならないことである。指導と援助について理解を深めることは、教育現場に最も必要な課題である。子どもの絵の発達段階の理解は、一つの目安であって結果ではない。まして子どもの成長は一人ひとり違うことを前提にするべきであり、横に伸ばす成長を援助していくかが絵画教育には問われている。

2. 研究課題

現在、本学で行っている図画工作教育、造形研究の授業で実施する美術教育は、単なる教養だけではなく目指すは教師教育である。受講している学生には、教育内容をより正確に把握するために、これまで受けてきた教育と現在受けている教育について調査し、回答と感想を求めた。任意回答だが、一般的な美術教育の実態がみえる。(内容後述)美術教育は理論と共に、基礎の実技(表現力)無しには語れない。とりわけ基礎デッサンの大切さは指導する上でも、考え方を構築する上でも重要である。従って学生には、教育力を身に付ける実践方法の研究を課題としている。同様に、教育現場での絵画制作における指導・援助に対する考え方の研究である。図工教育全般にいえることだが、制作過程に重きを置く《援助》と作品主義といわれる《指導》の課題が横たわる。以下、『新造形表現』花篤實、岡田愨吾編著から一部要約抜粋引用する。【幼稚園教育要領や保育所保育指針では、子どもの活動に関して指導という言葉は少なく、ほとんどが援助という言葉で記述されている。それには幼児教育の変遷の中で「絵画制作」又は「造形」の様に、6領域に分けて保育を行っていた時代もあり、保育者が子どもに教えるという一方的な指導法が広まった反省とも考えられる。絵画制作において保育者が決めた方法で教えれば指導はスムーズになる。しかし子どもたちの中に育つはずの試行錯誤、感情、社会性等の様々な部分が育たない。教えたい表現技術や方法は得られるかもしれないが限られた経験の中で上手く出来なくても先生の援助で何とか作品を作れば、子どもは次も自分は出来ると思えるだろう。教え込みでは、失敗が少ない代わりに、子どもは失敗を挫折として捉えたり、自分が上手く描けないのは苦手だからと感じたりする子どもをつくってしまう。自己有能感を育てるためにも個々で活動する造形表現は巧緻性のみならず、思考や感情を育んで達成感を持たせたいものである。援助では指導をしないのかということそうでもなく、子どもたちが発見することを大切にしながらも、子どもたちが自分なりに描いたり作ったり出来るようになるためには、子どもはその時は聞く姿勢にな

り保育者は教えずなくてはならない。技法遊びでは方法を教え、絵を描く前には保育者は子どもたちにそれぞれの意見を確認する。中略、子どものイメージを明確にするための指導であり、援助である。造形表現の指導は、その時々で援助であり指導であってほしい。こうして、造形や、絵画表現において、活動を進めるにつれて子どもたちは自らの経験を考え、表現しつつ、振り返る場を持てる。】以上引用文。ここで「教育力を身に付ける実技研究と幼児教育の指導内容」を同列に語れないが、身に付けた教育力(実技表現力)を背景に幼・童画の理解に生かせるとする考え方である。

この稿では、実践研究(其の1)として様々な基本のデッサン研究の中から、初心者が学習する内容を取り上げ、基本形である《正6面体》のデッサンの基礎技術を作例と技法の指導方法を研究課題とした。道具として鉛筆の削り方、鉛筆の持ち方、鉛筆による色の出し方をはじめ、鉛筆によるグラデーションから立体表現をする上で形の成り立ちや明度による表現の学習方法についてそのプロセスを考える。

3. 課題設定理由

本年度のアンケート(図工、造形表現、美術史受講者約120名)によると、本学の学生は「中学校、高等学校の美術でデッサン教育を受けていない、受けたかも知れないが忘れた、又は選択授業で他教科を選択して美術の授業は受けていない」といった回答が多かった。従って美術教育に関しての学習は概ね初心者である。これは現在の学校教育のシステムにも問題があると言わざるを得ない。美術に関する基礎学習をこの段階で身につけておかないと、教師を目指すのは心配である。基礎学習は本稿で取り上げるデッサン教育に限ったことではなく、色彩に関する学習や図法の学習も同時に行うべき基礎学習である。特にデッサンに関しては、幾つかあるハードルを順次クリアしていく要素を持っているので、ここでは入門の部分に限定して課題とした。

過去の経験から、美術教育の基礎部分に不安を感じていたことや、創造性や独創性を求めているが、基礎となる描画力が余りにも稚拙であるこ

とを教育現場で痛感したこともある。本論に述べるように学習する年齢や時期については、過去の歴史も語るように十代中頃から二十歳前後で習得させないと、本当の基礎力は身に付かないと考えられる。学校教育では幼・小学校の図工教育と中・高等学校の美術教育はどちらも同じ芸術教育であるが、指導者側の立場からみると、明らかに《異質》のものである。幼小の図画工作は援助を中心とした教育であり、中高の美術教育は指導を中心とした教育といえるだろう。幼・童画の援助に必要なことは、心理面の捉え方である。教師を目指す本学の学生はデッサンへの興味、関心、理解、更に描画力を身につける。絵画教育とは何かを考えることは普遍のテーマであり、大人の絵画教育と幼・童画教育の指導方法の違いを認識する。子どもの絵が稚拙であって取るに足らない、指導すれば上達するといった間違った概念で捉え、ぬり絵やアニメキャラクター等を制作課題とすることや、課題指導（結果誘導）するといった創造教育を逸脱する問題を解決したい。デッサン教育の課題は、絵画の本質の理解を深めるための第一歩と考えている。

4. 研究の趣旨

幼・童画教育に携わる教師には、子どもの感性にに応じられるように感性を磨く必要があり造形学習の基本として、形の捉え方や色彩理論を共に学ぶべきである。造形表現における主要な領域として、小学校、幼稚園教育要領・図画工作に示されているように、「感性を働かせ、作りだす喜びを味わうことや、造形的な創造活動の基礎的な能力の育成を一層重要視する」視点である。この目標に即して研究対象の学生には、授業実践を通して実際に体験した学習のデータと今後の教育指導の方向を検討課題とし研究を進めたい。基礎の描画技術は幼・童画教育の鑑賞力に於いて、最も生かされると確信している。

絵画教育の分野は、子ども期と青年期に分けられる。青年期の教育について専門家の例であるが、『デッサンのすすめ』（伊藤廉氏の著作）によると『習練でつくられる技巧というものは25,6歳ぐらいまでにできあがるものではないだろうか』と考

える』と述べている。数多い作家の中から著名な人物の作品から得られたデータである。中世ルネサンス期以降の有名作家の調査でも、若い時の習練の必要性が証明されている。

現代絵画は、写実主義から印象主義に移行した19世紀西欧社会全体の変動を背景とした大きな流れにある。近代絵画の出発点は、当時歴史画を頂点とするもので1860年代に登場、後に印象派と呼ばれる画家たちは写実主義に立ちながら、新しい感受性を持ち現実の世界に目を向けた、この時代は社会の大きな構造的転換があった。これらを背景に生活様式の変化への対応が《絵画本来の姿》であり、絵画の存在と研究テーマの理由でもある。

5. 研究内容

①子どもの画の心と基礎デッサン研究（序）：

デッサンは、美術の世界では基礎的学習と捉えられ、終生続ける修業でもあり奥が深く従って指導することはやさしくない。初心者の場合、学習者の力量、特に意欲関心の持ち方にもよるが果たして、教えられてどこまで身につくか、学習に取り組む意欲、姿勢、精神性や感性は教えられて学ぶものなのか、苦慮するところである。デッサンは基礎学習であるが、集団の学校教育でレベルを上げるのは容易でない。デッサンに限らないが基礎力無しには、次のステージで羽ばたくのは困難である。一般にデッサンは、簡単に描く描画と思われがちだが、単色による明暗（明度のみ）の絵画表現でありながら、実は様々な要素を含み目を鍛え心に訴える力量を望むことは簡単なことではなく、物事の本質を伝える教育は難しい。しかし将来保育指導・援助に関わる学生には、努力して技術実践力を身につけて欲しい。

デッサンについて語る時、デッサン（Dessin＝仏語）……ドローイング（Drawing＝英語）……が、同意語として（素描＝日本語）だが、デッサンは、造形表現における基本的な技法の習練であり、また作品の下地や構想などのことも意味するものである。デッサンは、必ずしも日本語の「素描」ではない、と考えるのは私だけではなく、語意を考える処に、本質が見えるような気がする。

教養としてのデッサンは、当然出来ることが当たり前と思われがちだが、授業後のアンケートの回答を見る限り、中高の教育とは、一体何だったのかと疑いたくもなる教育事情が浮かび上がってくる。本学では、幼小教諭、保育士を養成する機関であるから選択者には必修要件として、基礎力を付けるべく授業環境を作っている。概ね講義授業後半の時間に実技実習を取り入れている。この課題は、初年度、二年目というように順を追って上手くなるとは限らない。実技訓練を重ねているうちに、ハッと気付く要素があるようである。初めから技術の上手さを持っている学生も僅かながらいるが、そういう学生にも感性や感覚といった抽象的な表現や課題の理解に方向づけもしている。

保育内容シリーズ〈谷田貝公昭監修・一藝社〉・造形・第三章・《保育者に必要な感性》の、冒頭の一節である。以下一部引用する。『子どもの感性に感じられるように、保育者自身も感性を磨くことが重要なことは言うまでもない。そのためには、絵画を鑑賞したり本を読んだり映画をみたりすること等も大変有効であるが、具体的に「造形」に必要な感性をみがくにはどうすれば良いのだろうか。造形の基本は「形」と「色」である。「形」と「色」に対する感性を磨くには、それらの成り立ちを知り、成り立ちに従って自身で形を描き、色をつくってみるに勝ることはない。これらを経験することによって、今までとは違う形の見方や色の見方が出来、また描けるようになるのである。』以上引用文。

デッサン学習の取り組みは、知識程度の趣味教養、美術専門（美大系進学）、仕事（教員免許資格）それぞれの目的（取り組み）によって学びの内容が違ってくる。本稿の研究では意義ある考え方として、始めに『デッサンとは』について、大学のテキスト（文部省認可通信教育部：武蔵野美術大学）の一部を要約抜粋。紙面の都合で、簡潔に①～⑥迄の項目にまとめた。

① はじめに：

デッサンは「素描」と訳されるがスケッチや写生画と混同してはならない。デッサンとは広い意味では、芸術家の教養である。具体的には造形芸

術の構造を理解しそれを表現することである。これは技術の基本となるものである。いかに高邁な思想も、又溢れ出る感動も、それを表現する技術がなければ、人々に伝達することは出来ない。従って技術の重要性は表現には欠くことの出来ないものであるが、「技術」が「人間」から遊離して機械的になることは良くないのである。

② デッサンは学ぶべきか悟るべきか：

初歩のデッサンは、実習して体得するものである。そして実習を通して悟るように、体で覚えて体に同化していくべき性質のものである。初歩の第一段階では模倣から始める。まず「対象」（描くべき物）に従うことである。ものを視て忠実に描くことから始める。「対象」が見えた通りに描けることだけでも大変な仕事である。これはデッサンに入る前提で、本当はこの段階は少年期に終えておきたいものである。この段階は早く切り上げてしまいたい。しかしその間に別段ははっきりした区別は無いのであるから、自然に「対象」の視方、感じ方、表現の仕方が個性的に違ってくるのがよく、その時からデッサンの態勢に入ったとみてよい。（中略）デッサンは人間をつくる。人間が又デッサンを深くする。その相関関係が、ものを視、ものを感じ、ものを理解する深さと角度を次第に変えてくるのである。要するに「感動」する対象も内容も質も、高さも、厳しさもあらゆる点で、デッサンの修練の結果身について向上していくものである。

③ デッサンの正しい勉強法：

デッサンを理解し、身につけるにはどうしたらよいか。はじめに正しい軌道に乗り、正しい指導を受けることが望ましい。初期のデッサン修行をいい加減にして、晩年を迎えても取り返しは出来ない。何年やったから充分だということではない。デッサンの正しい理解と厳しい修練を積んだかどうかが問題である。

④ デッサンの精神と態度：

デッサンは、具体的な技術の勉強と同時に「生き方」の鍛錬をもすることである。これは技術偏重になるおそれを戒める意味で重要である。

⑤ よく「見る」ということ：

デッサンは、具体的な技術の勉強と同時に「生

き方」の鍛錬をもすることである。良く「見る」ということである。「見る」ことから始まる。良く対象を視ること、そして感じること、そして激しく感動することである。目と心で感じ、頭で理解し、体で描く。

⑥ 秩序：

美術全般にわたって描きながら秩序を探すことである。秩序とはいろいろの要素が何らかの関係に総合されて一つの体系をつくることである。（後略）・以上要約抜粋部分

⑦ 幼・児童教育に大人の絵画学習（デッサン）の必要性：

美術教育の中で特に習熟を要する実技、とりわけ基礎デッサンの指導は、欠かすことが出来ないのは、絵画全般を理解する上で、最低限必要な技術だからである。デッサンとは具体的に造形芸術の構造を理解しそれを表現することである。これはいろいろな意味で技術の基本となるものである。子どもの絵画を観る上でどの部分に必要であるか。子どもの心の眼で感じ表現された感性や感覚で見た物に対する抽象的な形は、感性で捉える心しかない。即ち眼と感性を鍛えるためである。特に抽象化された表現は感覚に訴え持てるエネルギーが発散されているから、その空気を読み取る感性を育てる必要が生じるのである。

⑧ デッサンを学ぶ時期について：

基礎学習としてのデッサンは、早い方が良い。個人差はあるが本格的な技術を学ぶのは早くても12歳位だろう。12歳の時に描かれたピカソのデッサンが残されているが秀逸である。環境にもよるだろうが、小学校では早すぎるようである。伊藤廉の著作「デッサンのすすめ」によると25、6歳を習練でつくられる技巧のピークと考えると、遅くとも十代後半にはスタートしなくてはならないだろう。何年やったらということではなくその内容が問題で、簡単なことから階段を一段ずつ上るようにクリアすればおのずと見えてくるように思う。此の絵は「デッサンがないね」等の表現はしばしば聞かれる厳しい言葉だが、実は青年期に習練の積み重ねが在ったかどうか問われているの

である。

⑨ 紙は白くなくては行けないか：

基本的には、明度が一番高い白が良い。何色にも染まる白ということになる。明度の低い用具を使い描かれる色は明るい灰色から暗い灰色の色調であるから、ベースになる地色は明度が高い方が描き易い。色紙に描くこともなくはないが、デッサンの習練には明度の高い白が望ましい。これとは逆に、黒い紙に高明度の色で描く方法と、予め白い紙に黒い木炭を擦り込んでおいてパン等の消し具で描き出す技法等は、以前から行われている学習方法である。しかしながらこの手法が一般的でないのは、道具としての消し具が、パンや消しゴムの場合、細部を描きだすには自由が利きにくいことである。しかし空間の捉え方や空気感といった大きなマッサ（塊り）を捉える初期表現には、効果的であることは知られている。デッサン教育とは意味も内容も異なるが、黒い紙や色紙（色つきの画用紙）は、幼・児童画に於いて、目先の変化として利用すると効果がある。気分転換（発想を変える）という意味で絵画素材と捉えると、なかなか面白い表現が期待出来る。

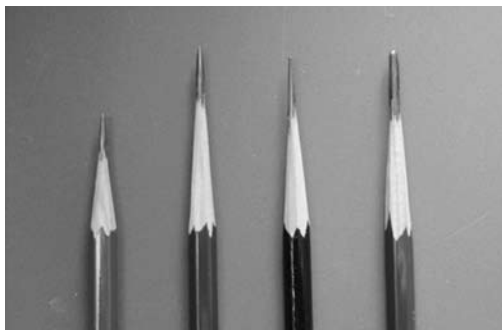
⑩ 基礎デッサン実技実践（技術解説）について：実技実践① 道具の作り方（鉛筆の扱い方と削り方）：

デッサンの用具は、筆記用具全般の他コンテ、クレヨン、クレパス、木炭等様々である。鉛筆によるデッサンは、近年では描画素材として主流である。理由は幾つかあるが、細部の表現、濃度のバリエーション、消しゴムが使える等が考えられる。

鉛筆は、グラファイト（黒鉛）と粘土（超微粒）の組み合わせとで焼結によって硬度に変化が生じる。それぞれの量加減で濃度にも影響する。デッサンで使用する鉛筆は道具として考えると、先ず削り方は難しくないが、若干習練を要する。所謂第一歩は道具作りである。授業では、芯の長さ木部の削り方には、必要な扱いやすい姿形があることを実物と図解して説明している。（写真資料参照）

【資料…1】 道具としての鉛筆削りについて：

下の写真は、削り方の例である。左からHB（文字用）中二本は2B、右は4B（共にデッサン用）鉛筆である。文字用とデッサン用と比較すると芯の長さ、木部の長さの削り具合が比較できる。木部は長いほど芯が折れにくく芯の腹を使うことも出来る描画用の削り方である。



実技実践② 鉛筆の持ち方鉛筆によるタッチ、そのバリエーション：

私の指導するデッサンでは、鉛筆の硬度（濃度）は紙の表面を傷つけない比較的やわらかい2Bを薦めている。硬度記号「B」はブラックの頭文字だが、記号「H」のハードに対する「B」は「S」ソフトと考えるように指導している。画面の大きさに合わせて硬度、濃度の選択をすれば良いのだが、入門段階では取り敢えず2B鉛筆一種類で充分描ける。

画面上で出来るだけ力を抜いて、鉛筆の重さを指先に感じながら芯の腹を使って画面全体に《腕全体が動く》ようにする。持ち方は場面によって幾通りもあるが、先ず紙に〈うすく乗る程度〉の芯の濃さを感じ取る。画面全体に気配りをしながら、構図は描きながら同時並行で考えるようにする。この他、筆圧や線を重ねる、擦るといった技法を学ぶのだが、描き始めに感じた形が大まかに基本形「セザンヌの言う自然を円柱、円錐、球として扱う」で捉えることは、即ち抽象的捉え方を意味するものである。抽象表現と抽象的捉え方には違いはあるが、表現することは写実的な具象に於いても考え方は全く同じであると考えて良い。

実技実践③ 輪郭描写と面描写：

ものの形に輪郭はないと言ったレオナルド・ダ・ヴィンチは、スフマート（伊：Sfumato）の創始者で

あるが、物体と空間との関係において周囲の空気感を出すために雰囲気を描くのに用いるばかりの技法である。輪郭は無いが『面』を描きだすことはデッサンの基本技術である。従って『面』の捉え方が見えてくると自然に空間を意識した表現となる。面の捉え方はグラデーションをイメージすると解りやすい。微妙な色調をグラデーションから学び、スフマートに移行する考え方の指導も一つの教育技術である。

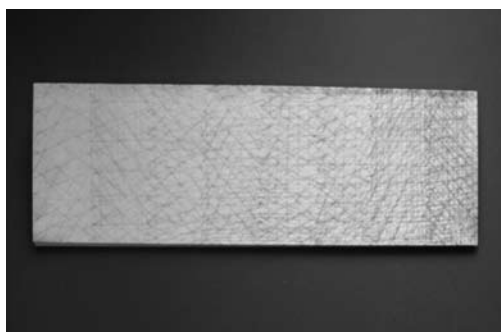
【資料…2】 鉛筆（2B）とボールペンによるグラデーション作例

実習では、左に明度の高い白、右に明度の低い黒があることを仮定して10色中8色の灰色のグラデーションを作る練習を課題とする。紙の大きさは、A4判の4つ折りで消しゴムは使用しない。

（鉛筆による作例）



（ボールペンによる作例）



実技実践④ 明度について、光と影、明暗について：

物は光が無いと全く見えないが光があればその反射で物に見える。従って光の存在と方向、強弱は絵画の中では一定の影響を受ける。更に目に見える明るさや暗さといったものは人の眼で作らだ

要素も持っている。つまり見えたままと見えな部分、見えるように描くこともあり得るのである。光と影の関係は見えたように、あるいは見えたままと考えがちだが、影は光の強弱や光の方向等によって創作する余地を秘めている。特に影を（暗い色）＝（黒色）という考え方は避けたい。光源の強弱に影響されると形を描きだす時に、影が形を見づらくする時もある。光の強さは描く側の考え方でコントロールは必要であろう。暗いことと黒とは全く違っており、暗いと感じた部分は、やや明度が低くなる位に考えた方が良い。印象派以後、画面に黒は存在しないと考える作家も多い。明度の中で黒以上の暗い色は無いから、黒は暗い灰色という考え方に留めると考えるべきである。入門段階では、デッサンの色と言われる明るさの度合いによる表現技術を先ず《感覚的に捉えること》を指導する。

実技実践⑤ グラデーションの課題：

明暗の階調を作ることであるが、理屈で解っていても技術が伴わないので、鉛筆の持ち方、手の動かし方という手順で解説指導を進める。明暗の色として捉えられない原因は、これまでの指導で筆圧に起因することが多いように感じる。白と黒を除く中間の色を課題では8色作るのだが、軽い筆圧が保てないと全体が黒い階調に終始する。指導のポイントは先ず技術を身につけることから、明るい色（高明度の灰色から）作る様にする。筆圧と線の数で白に近い明るい灰色が作れるようになると、鉛筆による色面作りがより理解出来る。濃淡の段階的変化が学習できると、明瞭な階調から《ぼかし》の技術は自然と身に着く。高明度（ハイライト）部分の描画力は、《デッサン力》の目安になる。この課題で技術がクリア出来ると、次の幾何形体の作画はスムーズに進行する。特に高明度の鉛筆の色は次に進む必要要件と見ている。授業では、これを越えた学生は正6面体も描けている。

実技実践⑥ 石膏幾何形体：

セザンヌは、「自然を円筒と円錐と球として扱う」（前出）といった。それまでの西洋絵画では、

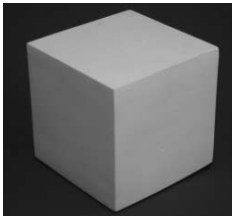
歴史画、宗教画、神話画等にみられるように主題というものを重視し「いかに描くか」よりも「何を描くか」がまず問題だった。又印象派などにしても、確かに主題偏重の従来の傾向には反撥しているものの、色調分割のような感覚にはしりすぎたために、形体の在り方を厳しく追及するという点がないがしろにされてしまった。この様な印象派の行き方に不満を持ったセザンヌは、構成的な立場から絵画に構築的な形態を与え堅牢で耐久性のあるものにしたいと考えた。要するに、絵画は形態と色彩とマチエールによる構成である。われわれが形態の基本ともいえるべき幾何形体を学ぶ目的もそのためである。セザンヌが言ったように複雑な形をした自然物でも、これを大きなマス（塊）としてみると、幾つかの基本形体から構成されていることがわかる。

⑥の参考資料として学生の参考作品と技法の手順作例を示す。

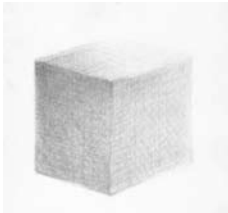
作画の要点（番号は順序を示す）

- 1、始めに画面構成：全体が見える方向や画面の中の大きさ採光について考える。
- 2、形体の中心軸を探して、左右上下の空間を画面上に決める。（鉛筆を寝かせて大きく捉える工夫をする）
- 3、大きな3つの面全体に直線を用いて軽いタッチで鉛筆を滑らせる。
- 4、大まかな形が捉えられたら、面と面の接点に注意し鉛筆の線を重ねて面を作る。
- 5、明るい面も暗い面同様に筆圧に注意しながら、線を重ねるように心がける。
- 6、この作画では消しゴムは使用しない。鉛筆のタッチには最初から、慎重に描き進めるねらいがある。消しゴム《絵画では白色として扱う》使用の詳細は、別稿とする。
- 7、3つの色面の違いと面と面の接触に気を付け、直線を重ねて面の色を作る様にする。
- 8、描きこむと暗い色の部分の色が乗らなくなるので、加減をして仕上げとする。

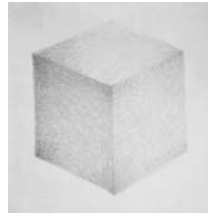
【資料…3】正六面体モチーフ〈石膏モデル〉（全体が見える形でセットする）



【資料…4】正六面体の鉛筆画（学生作品）三つの面の色、形が良く表現されている。



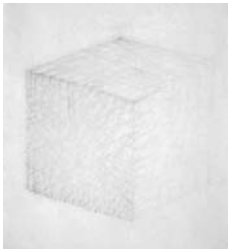
（学生作品）



（学生作品）

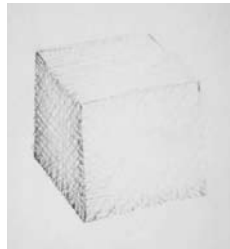
【資料…5】〈制作途中参考例〉描線が良く見えるように、鉛筆を変えてボールペン画の作例。

描き始めの段階（2B鉛筆画）

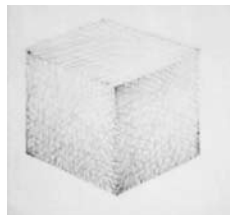
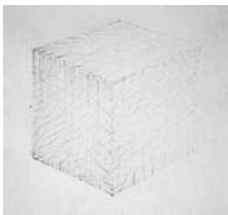


（青ボールペン画）

描画の途中（黒ボールペン画）



（赤ボールペン画）



【資料…6】《アンケート》本年度約120名の受講生に、以下のアンケートを行った。（原文）

美術教育アンケート

2011年12月6日

授業（実習課題）内容の理解度に関する研究調査

南九州大学 美術教育研究室 古賀 隆一

育の指導方法研究の為に行うものです。アンケート内容をそのまま公表することや、個人の評価に使用することはありません。

- ① デッサンで使用する鉛筆の削り方について。説明は理解出来ましたか。 Yes…No
 - ② 鉛筆の持ち方や使いかたについて。説明は理解出来ましたか。 Yes…No
 - ③ 正六面体を描くデッサンの手法（描き方）について。説明は理解出来ましたか。 Yes…No
 - ④ 鉛筆による明度差の表現技術で、灰色の色調は上手く作れましたか。 Yes…No
 - ⑤ 鉛筆による色面は、線を重ねて作りますが、軽いタッチで表現できますか。 Yes…No
- ①～⑤の中で特にNoと回答した人（理解できないところはどの部分ですか意見を聞かせて下さい）

- ⑥ 中学校、高等学校において、受けたデッサン教育の授業の感想を聞かせて下さい。

：基本形のデッサン（例えば正六面体、円柱、円錐、球体…他）：友達の顔：自分の手：自画像：その他

- ⑦ 中学校入学以来、美術の授業でデッサンの実技指導を全く受けたことがない。 Yes…No
 - ⑧ 美術の授業で実技指導を受けたが、基本形のデッサンの授業はなかった。 Yes…No
 - ⑨ 選択授業なので他の科目を選択して、美術の授業を受けなかった。 Yes…No
- 以下……Yes、Noの回答にかかわらず感想を聞かせて下さい。：
- ⑩ 過去、美術館等に足を運んで著名な作家のデッサンを観たことがありますか。 Yes…No
 - ⑪ この授業のデッサンの学習方法は、解りやすいですか。 Yes…No
 - ⑫ ここで学んでいるデッサンの技術が、将来役に立つと思いますか。 Yes…No

このアンケートは、本年度実施している美術教

回答者の受講科目：教科教育法造形表現、図画工作、美術史、その他（ゼミ）・・該当に○印を。

学年： 年 学籍番号：
氏名：

資料部分以上

アンケートの回答まとめ：

①②③について説明の理解に関して、概ね感覚的には理解出来ているようである。

④⑤について《表現が出来ない》の回答が圧倒的に多い。提出物の採点・評価をされていて気がついていることでもある。基本的に実習を繰り返して学習するしか方法はない。

⑥について、中高校で、基本のデッサンを学んだ学生は僅かであることが分かった。

⑧⑨について記憶に残らないほどの内容であった様で、基礎訓練は何もしていないと判断せざるを得ない。集団教育に於ける弊害は、教育の平等の考え方で平均値を求めていくとこのように中途半端な教育水準になるのではないだろうか。中高の学校教育は、専門家を育てるのではないからと、安易に基礎学習を見過ごしていると考えられる。

⑩⑪⑫について「美術館に行ったことが無い、何処にあるか分からない」に至る回答をみると、指導要領の鑑賞教育が果たしてどこまで浸透しているのか甚だ疑問である。それぞれの地方にある美術館に足を運んで、オリジナル作品を鑑賞する学習は特に大切にしたいと思う。オリジナル作品には、作品に呼吸や感動させる力を秘めている。

大学入学迄の学校教育で、デッサンの教育を受けて来ていない学生が多いことも分かった。「デッサンの基礎指導（実技を含む説明・解説）を受けていない。」このことは、授業の中で薄々感じていたことではあるが、我が国の美術教育の貧困といえるだろう。美術に於ける表現活動は多岐に亘っており、教育活動に於いてこれだけは、と切り取って行うものはないのだが、基本の表現技術は程度の差こそあれ是非学んで欲しい。教師

自身の力量は指導内容やその精神性に至るまで、影響を与える重要な立場であると認識して欲しい。いみじくも此の事が、一般の教師向け〈図工教育技術指導書〉なるものが、横行している理由であると言わざるを得ない。指導書として書かれたものにありがちな結果主義（結果誘導）、つまり作品を作り上げる事を旨とし、必要欠くべからざる創作、創造といったものは見られない。技術に走った〈図工指導書〉は、子どもの感性や感動を先取りした形式に終始し、作画のプロセスを中抜きして完成させる極めて〈悪質な指導書〉である。必要な援助力とは、作画のプロセスに対して援助するゆとりと自信、結果に対しておおらかさが指導する側に必要な能力である。

6. 要約

デッサンの習練と子どもの絵画に関わる本稿では、子どもの絵画表現の中に先ず抽象、具象表現という一般的に考えられている二つの概念が、共存又は同列に考えるべきことであると考えてきた。絵画表現の大きな括りの中で《目で見えるまま》を具象表現と呼び、違う要素を含んだ表現を非具象又は抽象表現と言葉で表現する。目で見える共通の理解に対しては正に見えるままの具象であるが、絵画の世界は後期印象派以後の心、感情、感性で捉えた表現は、非具象又は抽象と表現する。本稿の研究課題である基礎デッサン研究では、純粹に見えたままの形を平面上に立体感をもって表現する実習訓練を通して、目で見える形が、心や感性で捉える子どもの絵とどの部分で共通した認識と捉えられるのか。そこには《抽象的要素》を発見しようとする働きが考えられるのである。同様に生活経験の未熟な子どもは、技術以前の感性、感覚で素直に受け止め、新鮮な心の表現（抽象画）が出来るのである。子どもの画は《心を映す鏡》であるとは、恩師故大野元明（美術教育家）の言葉である。子どもの画は、豊かな抽象表現に満ち溢れている。正に感性に働きかけ、心に訴えかける表現手段が子どもの絵画である。形を捉えるという意味で具象表現から《抽象要素》を学び、そこで得られた感情、感性といった心の働きが何であるかを感じ（学び）取るのが、

指導者に必要なデッサン学習の使命と考えるのである。

参考文献：

- 『デッサンのすすめ』伊藤廉著・美術出版社1968
『西洋美術史』高階秀爾監修・美術出版社1990
『絵画』（デッサン編1）武蔵野美術大学刊行1970
『石膏デッサンの描き方Ⅰ』（アトリエNo.599）根岸正解説・美術出版社1977
『初級技法講座『初級技法講座「デッサン」用具と描き方』村松昭三著・美術出版社1995
『鉛筆で描く』建石修志著・美術出版社1977
『保育内容シリーズ⑥造形』谷田貝公昭監修・一藝社2004
『新造形表現』理論実践編、花篤實・岡田愨吾編著・三晃書房2009

注記：

本稿では、「子どもの絵」「幼児・児童画」「幼児画」と使い分けているが、大きな年齢差はなく、言葉の前後関係のニュアンス程度の違いである。アンケートにより、中学・高等学校の美術教育の実態を捉えようと試みたが、学生数、単年度という制約で、任意回答から正確なデータを導き出すには至っていない。従って今後数年継続し、然る後に明確な結論が得られるのではないかと期待している。（了）

Summary

This paper presents an introduction of practical skill and practice with the content of learning to seize children's psychology of drawing and painting, and to gain the necessary sensibility for the student who aims to be a teacher.

The pictorial representation of the child is abstract from which their psychology, feelings and sensitivity can be understood. The common feature of pictures drawn by adult and child is the expression of the heart. Learning from children's picture is a kind of education connected with support mainly and teaching. The students who aim to be teacher should learn the basic *dessin* which enables them with the ability to observe the shapes (forms?). Therefore, I think that learning the basic *dessin* is to learn the abstractions needed to learn the element of painting. Based on the experience in educational front, one purpose of my research is to develop education (support mainly and teaching followed) by learning of the basic *dessin*.

Quoted the words from Genmei Ono who is my beloved teacher, and an art educator, child's picture is a mirror reflecting heart. Actually, child's picture is a way to express his or her heart. The learning of *dessin* is to learn the abstract elements, i.e. sensibility, feelings and mood from the embodiment which is to capture the form.